特43
918

014439-000-2

特43-918

天理教御教祖御一代記

山中　重太郎／著

M33

ABB-0817

特43
918

自序

英雄豪傑を傳ふるの困難なることは龍を畫くことの困難なるが如し宗教の開祖一代記を作ることの困難なるは神佛を活寫することの困難なるにも似たり左も然ふず二者共に神變不可思議靈妙廣大深奥千万無量の極上なる風品を備ふることの多大なれば也予今天理教々祖一代記を作る敢て傳し得たりと思はず唯々一

帝國圖書館藏

片の面影以て俗世の誤解を釋かんと欲するのみ若し夫れ少しく心を得るものに至つては謹而大方の教訓を受け自から信仰の精を養ひ堅固なる智識を集めて而して後のことのみ今は唯だ不文粗心我が罪を謝するのみ嗚呼我が罪を謹而謝す

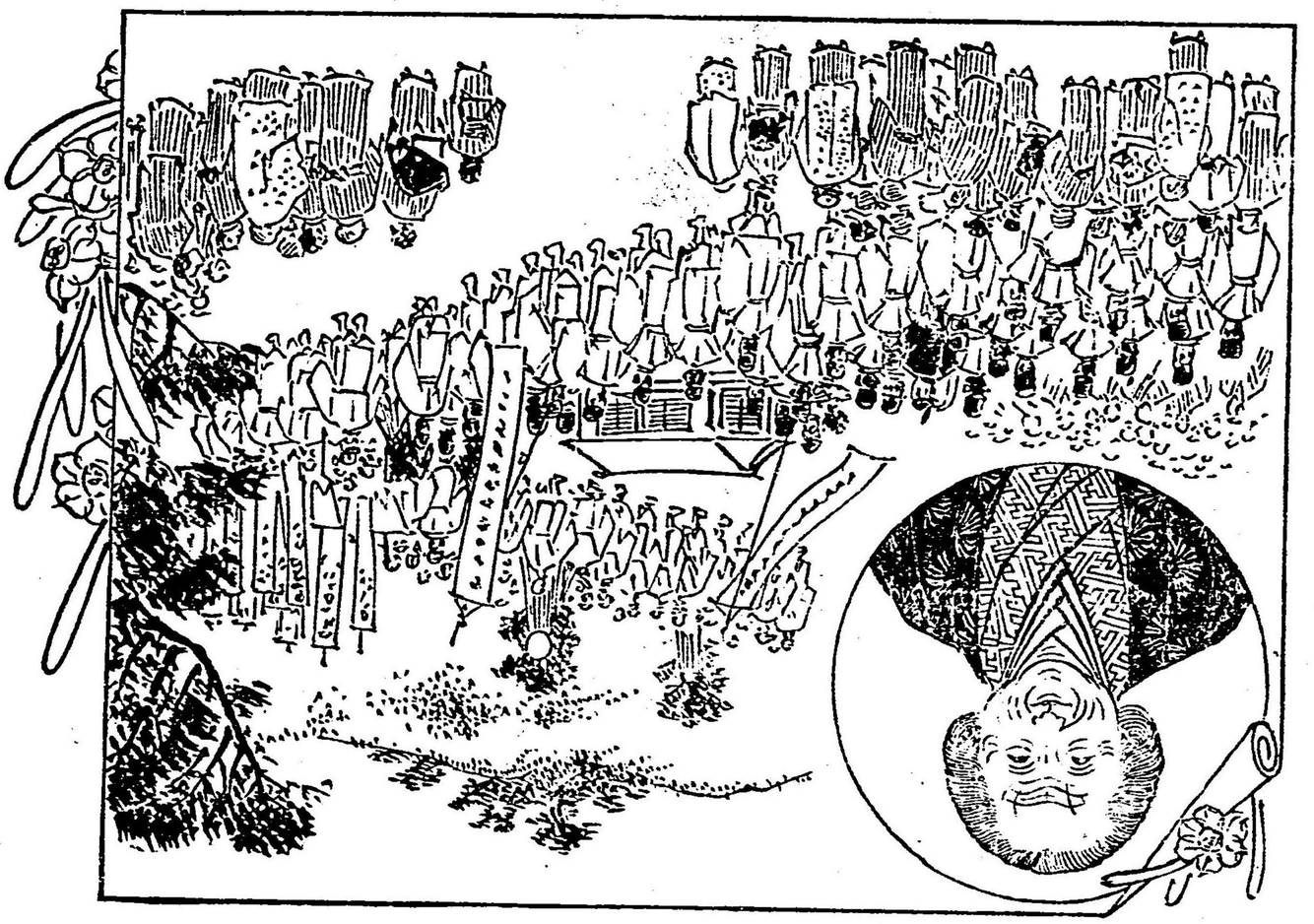
明治三十三年一月廿八日

不孝兒　山中重太郎　識

時の流行に捉はれて俗世の理解を解かんとせずして自分の心を作るのに至つて俗世而大方の批評を受けず自から信仰の精を養ひ医国を救ひて而して後のことのみ今は唯花柳文壇の我が野を占ずるのみ嗚呼我が罪を謝す

明治三十三年一月廿八日

本郷　山中愛太郎　識

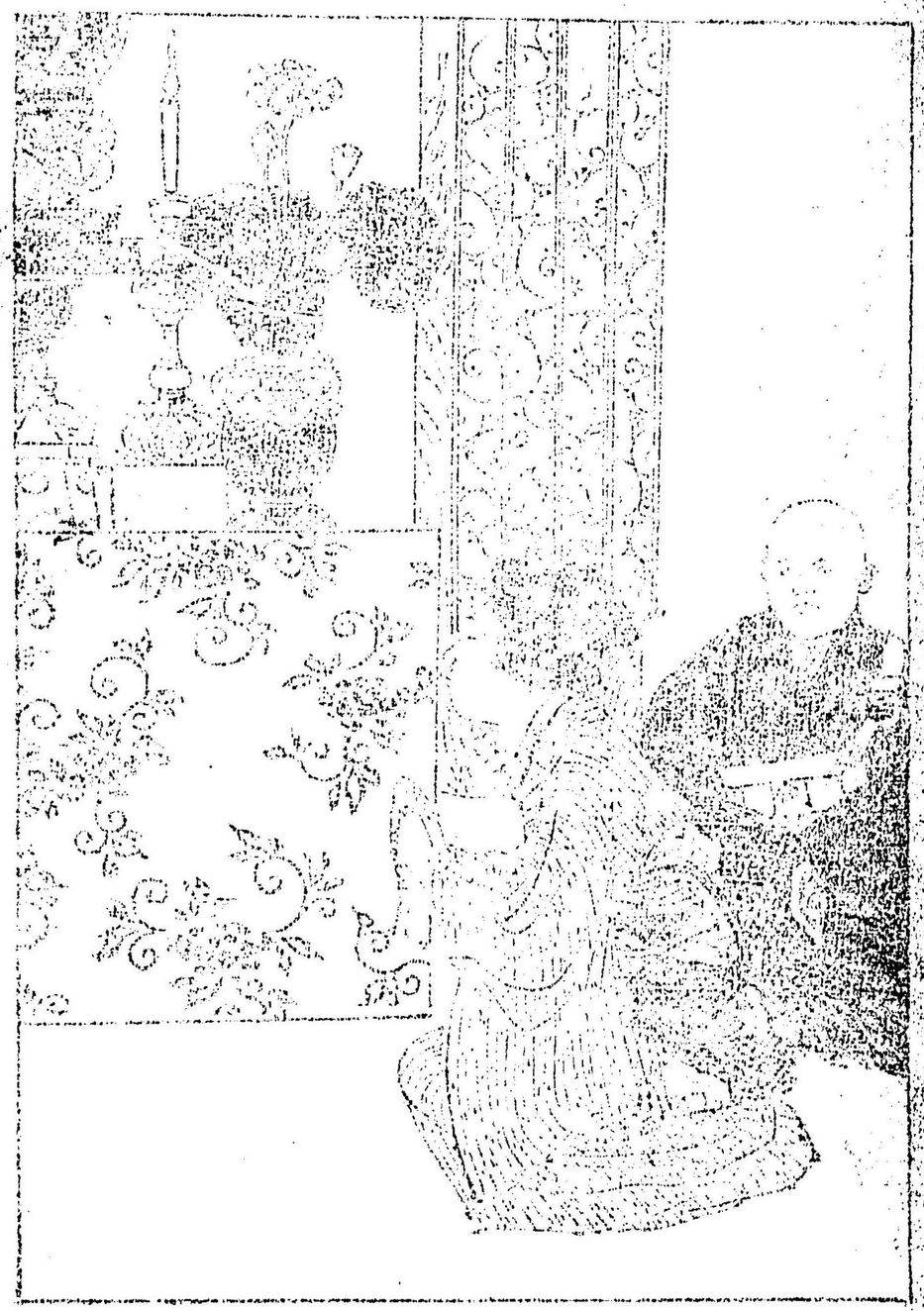


天理教御教祖御一代記目次

一　御誕生
二　御結婚
三　御出産
四　御産後
五　御産後
六　御産後
七　御産後
八　御産後
九　御産後
十　御産後
十一　御産後

天理教御教祖御一代記目次

第一章　御誕生
第二章　御幼時
第三章　御家帯佛
第四章　御少時
第五章　御入産
第六章　御世生
第七章　御初信
第八章　御平信
第九章　御救助
第十章　御神助
第十一章　御神々



第十二章　御艱難
第十三章　御死別
第十四章　御覺悟
第十五章　御貧苦
第十六章　御自信
第十七章　御弟子
第十八章　御入牢
第十九章　御慈悲
第二十章　御歸幽

○御神歌

○此の書の成り立ちし次第

天理教御教祖御一代記

第一章　御誕生

天は此の世界を助け救はんがために天理教御教祖眞道彌廣言知女命中山みき子を我等の此の土に降し賜ふ實に夫れ寛政十年四月四日は大和國山邊郡三昧田村に於て大なる神人が此の世に現はれ給ひたるの日也時に櫻の花は里の眞垣に匂ひ四方の山々は霞に笑ふ蝶は舞ひ鳥は歌ひて大なる救けの主の下降をことほき奉れりアそのときの人は後の御教祖を思ひ得たりしや否や天の幽思は衆生の知らざる處のものにてやありしならん

御教祖の父を前川半七といふ家は藤原家の末流なり母をきぬ子と云ふ長尾家より入りし人也御教祖兄弟五人あり長を杢壽計と云ひ二男を伴三郎と云ひ二女をくわ子と云ひ三女をきく子と云ふ教祖は實にその長女也

恭しく惟みるに教祖の父は謹嚴方正の品を備へ母は優美眞實の性を有ちたるの人家庭は常に靜和温良の風を帶びて善き天民の体を備ふ兄の杢壽計は平安篤實の人にして弟の伴三郎は用心堅固の人くわ子の沈着きく子の柔和何れも人徳の美質を帶ぶ御教祖は實に斯る結搆なる美はしき家に於て生れ育てられ給ひたるなり

今にして思ふに寛政の十年は徳川の流れ中ばをすぎて花奢輕薄の風六十余州に溺り人の心何となふ實ならず日本各州の諸宗ハ徳ならぎ御國の神道もその光稍々薄らげり頓て來ん文政天保安政慶應の世の亂れ日本は正に危からんとす天は御國の行末を念ト玉ひて茲に御教祖を産み給ひしかや

世に宗教の數は多く世に教祖の數は多けれども天理教御教祖の如く優美崇高偉大靈活の致を極めたるの人はなしその御一代の御有様は眞に天の大神に代りて人に悟の光を授くるに千々万づの御苦勞思ふだに語るだに

涙を催す御事のみ賤しき我らの拙き身をもて御一代のあらましをものするは誠に有難き神恩にむせぶの餘りなり神恩にむせび乍ら御教祖の奇蹟と豫言とを今省きたるは深く考ふる處あればなり後日詳傳を作るの日を待ち玉へ唯よく記せよ四月四日は我等の良辰吉日也

第二章　御幼時

人の幼きときは人の尤も清らかなるのときなり人の尤も清らかなるのときは天の心に尤もよく協ふのときなり實にや御教祖の「さんさいこゝろ」と言ひ玉ひたる三才の心は極樂へ通ふの心なり三才の心は神の御國に通ふの心なり三才の心はまことに佛の心なり

御教祖の御幼時の如何にあどなくしほらしくいみじく在したる申すも言の葉のなき思ひぞする春はのどかなる野の花とほゝゑみ秋はさやかなる大空にまりをかけ夏は夕涼みの面白くさゞれうた冬は父母の御ひざもとに手ずさびや兄なる人に敬ひ事へ妹なる人に愛をかけねん〳〵ころりの御歌にいかにやさしき心を示し玉ひけん御教祖は何事にもつゝましやかにとりなし玉ひてをもちやを毀すなどのことはなくひな人形をつくるにも人にまされる御手あり巡禮の門に立てるものあれば報

謝の心自然にあらはれ里の貧しき家の子には我が食物をもちやをも喜んで與へ玉ふそのれんふるまひわざと大人びぜわざと小供をまげたまはす天然にすゝしき御たましひの程人をして深く感ぜしめたりしとぞ

第三章　御少時

御教祖はもたかなは家にのぞかに御くらし玉ひつゝ次第に御年を召し玉ふ既に七つ八つ九つを經て十一二ともなり玉ひぬればその御姿も御心もまことに美しくなり玉ふ

御擧動御しとやかにして御言葉のあざやかなること世

に類もなし餘所の小娘は容色衣裳に氣を奪はるゝ例なれども御教祖はさる御樣子あらず飽迄御すなをにて何事も父母の御仰に從ひ裁縫手習に余念もなく温靜にながらへ玉ふ

富める家に生れ何の不足もなく育てられたる子はをしなべて我をたかぶり人を見下げ貧しき人の兒などにつれなきが常なれども御教祖はさることを露だにをはさぜ何につけても自から謹み自から戒め玉ふされど陰氣なる体を好み玉ふにあらず笑ふべきには笑ひたはむるべきにたはむれいとにこやかにながらへ玉ふ

當時のことの人の記臆に著るしきはその家の下男下女にまで親切の情ふかく成るべく人を使はせ自から身を動かし下なるものを密かに慰め玉ひしとよ

第四章　御入家

御身の上に一つの御變りこそ出で來りつれ其は文化七年二月五日御年十三才にして中山家に養女として御入家し玉ふ御事なりア、此の中山家こそ御教祖につきぬ因みのある家にはありけれ御教祖が浮世の風に吹かれ浮世の旅になやみ御かんがゝりあり御道の理を四海に布き玉ひたるは實に此の中山家に於てなりけれ

思ひ起す如月はまだ餘寒の風さむくさへかへりたる大空にはあられのしまけもありぬれどけふは殊更に天氣うらゝかにして日あたゝかく梅は園生に香りをはなち小川の流れは清らに澄めり藪には鶯の歌あいらしく辻には村の小供の聲あどなし同ド國同し郡三島の里の中山善兵衛とし云へばわたりはひゞく土豪の族なりければその養女入家の儀式の榮あるはなか〳〵なり御教祖は身に錦繡のふりそでをまとひ輿により多くの荷物を從へて目出度中山家に入り玉ふ

これを花にたとふればまさに蕾の御齡これを時候にな

そらふれば正に春の初めつ方そのにほひの如何に床しくその心榮の如何に氣高きかは伺ひ奉るにあまりありアヽ三島の庄屋敷は万古不動の御靈地なり御靈地は人の此の世のつながる處也衆生の命のつながる處也大神の光のあらはるる處也今にして思ひ奉る中山家に入り玉ひしは此の靈地に入り玉ひし也さても神秘不思議なる天縁なる哉

第六章　御世帶

世帶は人たるものゝつとめなりとは云ひ乍ら世帶は人の心にはこりにでりを染ましむるものなり實にや世帶は人を罪に導くの法と古人の云ひけん世帶を潔く完くすることはまことに人生の難事なり

御教祖は御年十五才にして御世帶を持ち玉ふ十五才と云へば未た幼氣のはなれぬ齡にて米鹽などのわきまへのなきを世の娘の習とはすれど天然自然に万人にすくれさせ玉へる御教祖には如何ありけん夫善兵衛に從ふては貞節を盡し義父義母に仕へては孝養を盡し親族鄕黨には信を盡しさまゝのほこりの中に清き御身を立て玉ひき

物には表裏あり事には善惡あり人には曲直あり品には

美醜あり浮世には波あり風あり世帯を持つの役を完く
することは實に人の勞事なり御教祖は御とも召さす
に此の御難事に當り玉ふ自づからの御たましひ慥にし
て清らけくゆるやかにして守りある御教祖は事もなけ
に大なる一家いとなみの任に當り玉ひき
喜べともその分を忘れず怒れども其の体を失はぜ悲め
どもその心を倒さぜ樂めどもその身を亂さゝる御教祖
は天眞にして優美きことにまめやかに世を渡り玉ふ

第七章　御信佛

昔より今に至るまて千人萬人に秀ぐるゝ人々に佛や神

を信心せぬ人はなし信心のうすき人は大抵その道德堅
固ならぜ天地を父母として世にある人の天地の親たる
神明佛陀を信心するはまことに人たるものゝつとめ也
御教祖は幼き頃より神に祈り佛に拜するの御心つよき
御方にてをはせしが御とし七をめし玉ふとともに次第に
〈御神心の御心さし加はり御年十八才のとき五重相
傳の密授を受け玉ふ
御年十八才とし云へば人ゝ齡の花の春朝ゝ鏡に向ひ夕
べに紅白にまみれ容色のかさりに他事なき御頃はひな
りよしなきことを樂み喜びてまことの樂しみと喜びと

を知らずはかなき浮世の榮花にうき身をやつすべき御身よりて悟入の光をしたひ玉ひふるつて佛の道にきわし玉ふ御心の中すゞしくも又さやかなる限りと云はまし

第八章　御初産

産は女子の大役なり産の苦痛となやみは其を經なる人にあらざれは人に語るべからず眞に産は女子をしてつきぬ涙の味を知らしむるものなり御教祖は御年二十四才にして御初産をなし玉ふ時は正に文政四年七月二十四日御子を秀司と云ふ

かゝるくるしみとなやみとをなめ玉はさるときに於てさへ御心配りの床しさ極まりなかりし御教祖は茲に於て如何に天の光をより多ふくみをめ玉ひしぞアヽ四大の苦惱よつて御教祖は何を認め玉ひしぞや

第九章　御平生

人は平生が大事なり人の平生は人の命なり人の命は天然自然のまゝにてあるべきなりと思ふ

人に見せんがために善をなすは眞の善にあらず人に譽められんがために美事をなすは眞の美事にあらず

隱微れたるは鑒玉ふ神佛は顯明に報たもふものなり陰德は眞の德なり

ウブのまゝの心　ジミのまゝの心　スナホの心　まこ
との心は人の平生の寶なり此の寶は天の賜なり
賤しきは身分にあらず其の心を云ふなり貴きは其の身
分にあらず其の心を指すなり自分を愛するが如く他人
を愛せよ自分の爲めに天に祈る如く自分の敵のために
も天に祈れよこれ人のつとめなり
口よは云ひ玉わねどその御胸にはあけくれ斯の如く思
ひ定め居玉ひしは御教祖の日夜の御振舞にて知らるゝ
こそ忝なけれ

第十章　御信神

日本は神の國なりとは人の知る處なり神は日本の王に
して又た世界の王なり神を信するものは榮へ神に反く
ものは亡ぶこれ天理人道の本元なり
日本には神の御名多しいろ〳〵さま〳〵の神名多し
何れも威靈崇尊なりとは申せども大神宮こそとり分け
貴き神にてあるなれ
御教祖は伊勢の大宮へは心を盡して詣で玉ひし八幡宮
春日宮天神宮へも詣で玉ひしその氏神への御信神は餘
人の及ばぬ御精神とぞ聞へし
かゝる結構なる御信神はほどなくまことの神もとの神

の御ひざもとへ參り玉ふの御下地にやありしならん

第十一章　御救助

他人を救ふは我身を救ふなり世を助くるは我身を助くるなり我より出でたるものは皆な我に返へる我正しければ我心たのしく我邪なれば我心くるしゝこれ天理人道の要なり

御教祖は天性御慈悲心丶富み玉ひたれは我が力の及ぶかぎり人を救ひ助くるを此上もなき足納となし玉ひたりされば巳のが村を過きる乞食巡禮の徒をめくみ玉ふは云ふに及はす下口の水呑百姓をいたはり里の勞働者をいたはり玉ひたり悲しめるものにあへは慰めて勵ましし怒れるものにあへは靜めて調へ亂るゝものにあへは戒めて治め玉ひしこと數知れぜとぞ

第十二章　御神加々理

そも〳〵此の世は如何なる處ゝや人は何處より來りて何處へか行く時は如何處は如何迷が悟にて悟が迷なるか醒むるとは何なるぞ眠むるとは何なるぞ

我らの見る處の夢は彼の世の心にて現は此の世の心なるかや

此の心は誰れの作りしものなるか此の身は誰れの作り

しものなるか此の心此の身は何れより來り何れへか行く

神はあるものなるか神は無きものなるかそも〳〵神とは如何なるものなるか

最もまことなるもの最もよきもの最もうるはしきもの是れ卽ち神の心なりときく神は果して何處の空にありや

嗚呼天保九年十月二十六日は實に我々の記臆すべきの日也教祖は此の日の此の世俄然として神かゝりの御身となり玉ふゝ夫れ夢なるか現なるか

教祖は清らけく力ある御聲をもての玉へり

「我れは天の將軍の命をうけて今より助けの教の道を世に弘む」と

「我聲は在天の大神の御聲なり大神の御聲を聞かんと希ふものは我に來れ」と

「人はます〳〵病むべく世はます〳〵亂るべし天はそれを悲んで我身を下し玉ふ」と

「世界に教の數は多けれども皆な一方に片よれり或は朽ち或は破れ或は亡ふ自然の人を助くるには自然の大神の教を要す我は天然の理の教を布んかために此

の土に下れり」と

「あはれなる浮世の人は疑深ふして道の理を知らぞ我は其通しの力を以て衆生を救ふべし諸天善神の通力は我身に有り」と

「ア、安心の大道を得ざる不便の衆生よ見よ白蓮は黒泥の中よりさくあらぢや人も婆婆にて神に歸命するを得るなりやよ我が云ふ處をきけ」

中山家の家族をはゞめ世の人々はこの愕くべく畏るべき宣言を聞ひて疑ひ怪しみ唯茫然たるばかりなり

第十二章　御教祖難

御教祖は自から我身の神の使たることを信ト玉へども夫善兵衛はこれを信せずまして世間の人々は誰一人かゝることを信ぜるものなし或は狂人と云ひ或は狐狂と云ひ或は痼癇と云ひ御教祖はさま〳〵に罵られ玉ひけり御痛わしさ云はん方もなし

御教祖は自から思ふ處の道の理を述べんとし玉へども夫は少しも之を恕さぜ人はかゝることを聞んとはせぜ愚ものよたわけものよ狂へるものよといろ〳〵に恥しめられ玉ひけり御いたわしさ實に云はん方もなし

御教祖はつら〳〵自から思ひ玉ふに我れ天の大神の命

をかしこみて人を助け世を救わんと欲すれば家にも夫にも子にも盡す能はず家や夫や子に盡さんと欲すれば天の命に從ひ難しア、大神の命に反かんか家や夫や子を見すてんかさては又た我身を殺ろさんかと御心を千々にくだき玉ふ思ひのほどぞ痛はしき

第十三章　御死別

御慈悲心のふかきこと海にもまされり御信仰心の高きこと山にもまされり

いつのほどにか御世帶は忘れ玉へり金銀財貨をうとみ玉へり出でゝあふ人毎に深きなさけをかけ玉へり

夫の善兵衛は大に怒り御教祖を殺ろさんとして刃をかざせしこと屢々あり御教祖は悶へくるしみて身をすてんと池の渚にたち入水をはかり玉ひしこと屢々なり家人の歎きは如何ばかりぞや世の人の笑と嘲と罵りとは如何ばかりぞや

あらゆるの苦勞と艱難との間に年はくれ年は明け嘉永六年二月二十二日の夜夫善兵衛は不平の間に死去す

ア、此のとき御教祖は如何なる感慨に沈み玉ひけん今にして察し拜むも涙にたへぬ思ひをぞする眞にこれ神人斷腸の處也

第十四章　御覺悟

大神の親の目には善もなければ惡もなし平等一切すべてこれまことの神の子なり神の子を人間と云ふ

人間は罪を作ること多くして地獄の鬼となり悟を開らくこと多くして極樂の佛となる鬼も佛も元は一の人間なり

草も木も虫も魚も鳥も獸も皆な悉く生々不滅の妙性をうく慈悲恩愛の眼光によりて事物に接するは轉輪覺悟の成道也人は之を知るべき也

床しきは因果因緣の理なり恐ろしきは因果因緣の理なり道の本は茲にあり理の本は茲にあり教の本は茲にあり宗教の根本實義は誠に茲にあり

ア、天地の間つねに動かざるものは眞理のみ眞理の中には無爲の幸福も無窮の生命もありこれを身にするぞ人の重寶なる三界は人の家也衆生は同胞也同胞の親は神なり神の子は眞理の力に依て活くるもの也これを知れよ

いでや衆生のために此の神秘を說き此の幽妙を說き大なる濟度の効をつまんかな

第十五章　御貧苦

五慾を捨て八迷を去り唯慈悲心を以て世を渡るこれ御教祖の御本願なりされば家財も金銀も田畑も人を助け救ふがために御教祖は塵芥の如くまきすて玉ふ中山家は元より素封家のことにしあれどもかくの如く心のまゝに御教祖のふるまひ玉ふにつけていかでその家の零落せざることあるべき家は次第〳〵に貧ふなりて乏はしき不自由のくるしみは頻りに御教祖をそひたり而して御教祖は富める時よりも却つて此の貧しき身の上を喜び樂み玉ふ

御教祖はその末だ貧しくならざるの前何の不自由もなき御身の上にて自分の隣りの家に足立輝之丞なるものあり悪疫黒疽にてなやめるをあはれみ我が二人の子を天にさゝげて輝之丞の平癒を天の大神に祈り玉ふ黒疽とし云へば現在の親にても厭ふの病なるに御教祖は自から日夜看護の任に當り百日百夜の祈願を込め玉ひさその御熱心なる御慈悲心は天も納受ましましけん迚も平癒すまゞき悪病はいへて輝之丞は七十二才の高齢を保ちたり此の輝之丞御教祖の恩を忘れ後に御教祖を狂人の如く罵りたりといへども御教祖は更に御心にかけ玉はず却つて此憐あるものを助けんとて數十年の間

御道の理をとき玉ひけり

御教祖三十六才のとき既に三人の子女をもち玉ひしが或日見るも不便なる女の乞食の我が門に立ちて物を乞へるあり御教祖は二人の子をつれ一人の赤子をはだに抱き門に出で玉ひしがやがて我子を下女に渡して自づからその乞食の背ゝ泣ける幼子をとりて我か乳を與へすかしつ親なる女の乞食には我が衣類を惠み深く行末を戒め玉ひしまとあり

或年ゝは大和街道に藥湯をつくりて道行く人に施行しつゝ自から樂しみ玉ひしことあり

或は又た我が一切の衣類器具を屋外に出して札を立て「此の品物入用の人には進上可仕べし」と示し玉ひ寄りくる人に悉く施し玉ひしとあり

人の心の田地に神の種をまくは功徳也人の胸に道理のふしんをするは功徳也人の顯の危きを救ふは功徳なりとのことを我御教祖は守り玉ひき

病めるものゝためゝは醫藥を與へ天に祈り悲しめるものゝためには慰安の料を給し苦しめるものゝためゝやめるものゝためには因果因縁の妙理をとき眞の樂しみを授け玉ひき

ア、我か御教祖は幾とせの間かくの如き御有様に御功徳をつみましつゝ次第〳〵に貧苦の御身の上となり玉ふ万民の厭ひ悲む貧苦を御教祖にはひとり静かに楽み玉ふ

第十六章　御自信

天に代りて道の理をとき玉ふ道の理を説くと共にあらゆる御苦勞の道をたどり玉ふア、御教祖の御覺悟の如何に堅固にましましつらん

御教祖は日夜氣高き御調子を以て助け一條の御眞理を示し玉へり

「あらゆるの人々は皆な神の子なり自分を大切にせざるものは神に背くものなり」

「人の慾は水の如く無ければならぬものなれども過ぐれば身をあやまつ」

諸根の壞るゝは死なり死は亡なりよろしく平生根を知つて根を治めざるべからず根を治むるは大事也

「をしい」「ほしい」「かわい」「にくい」「うらみ」「ねたむ」「よく」「こふまん」これらのものを八つの埃りと云ふ　埃りは罪なり罪を重ぬれば身上の病となるべし」

「人の身は一切天地の神のかりものなり一つとして自分のものにあらぜ悉く親様の借りものなりさればあくまで大切にせざるべからず借りものを粗末にするは親様への不孝なり」

「天は多くのしるしを以て人を戒め教へ玉ふこれによりて理を悟るべし」

「世にあはれなるものは多けれども病める人貧しき人ほどあはれなるはなしまれを地にたとふれば正しく谷底にすまへる人なりこれを救ふを功徳中の功徳とす」

「すべての芽はふしより出るものなり艱難辛苦は人を玉にす小き我を去るべし」

「なにかよろづのたすけあい」「一れつすましてかんろふだい」「ふうふそろふてひのきしん」「てんとちいとをかたどりてふうふをこしらへきたるてな」

輪廻轉生の理は光なり救濟歸命の理は光なり光は人天三界に輝き人に福德圓滿の甘露を與ふア、我は天地六合の神の使なる哉

御教祖の御心の中は到底我らの計り知るべき處ならぜ唯々赤なき福音にむせぶのみ

御教祖は四十才にして既に五人の子を産み玉ふ長男を秀司と云ひ(文政四年七月二十四日生明治十四年四月十日死去)長女をやす子と云ひ(文政十年生)二女まさ子(天保元年死亡)三女はる子と云ひ(天保三年九月二十一日生明治五年七月十七日死亡)四女つね子と云ひ(天保四年十一月七日生六才にして死亡)五女こかん子と云ふ天保八年十二月十五日生明治八年八月二十八日死亡)

三女はる子は梶本家に入りて龜吉松次郎たけ子ひさ子眞之助楢次郎の四子を産む何れの子女も御教祖に從ひて苦勞をつまれたりしが殊にひさ子眞之助楢次郎は一方ならぬ艱難を過き玉ひしの人也

實にそれ眞之亟は後年改めて新次郎と云ふ更に中山家を繼ぎて今現に天理教會本部長中山新次郎は此の人也

誠に是れ御教祖の御遺訓に依り玉ふなりア、天空海濶圓融自在の妙機を具へ玉へる御教祖は日本の眞柱を定め玉ひき

第十七章　御弟子

來るものは拒まず去るものは追はず天然自然に御教祖の御さとしに隨喜したる人々を御弟子と云ふ御弟子は何れも皆な正直質朴篤實の人々なり今も尙永らへ玉ふ

本席飯降伊藏辻忠作山中忠七松尾市兵衛仲田義三郎の如きは御弟子中の高足なり

御教祖は道の理を教へさとすを樂みとなし玉ふのみ家のいぶせきを厭ひ玉はす衣の破れたるを厭ひ玉はす飢餓の迫るを恐れ玉はぜ夕べに糸を紡ぎて市に賣り玉ふことあれは朝に山に入りて薪を拾ひ玉ふこともあり我身の汗を流してつくり玉ひたる草履も旅人にめぐみ玉へりされば御弟子達の御心は皆な御教祖のひながたに從ひてその言行の美はしきことまことにたとふるものなし今の諸國の教會の如きものを心に願ひ玉はねば御弟子達も强ひて進むることをせぜ或人は我山の材木を奉り或人は我働きを奉り又或人は薪水の勞をとり恭しく御教祖に仕へまつれり

御弟子達は御道の理を承りて我が心を定め亞て世の人々に傳へ宣ぶることを樂みとなすのみをのづからなる天然教ウブのまゝなる道德教シミのまゝなる自由神教を畏み拜してスナホのまゝに御弟子達は世の人に之を布き傳へられたりこれぞ今の天理教會の始めなるあはれ昔をしのぶ涙を以て今を見れば今の道の人々は教會を先にして道を後にし我を先にして理を後になす

のきざしなきにあらずこれ御道の榮への道ちすから教會組織統一成長の上にをひて余義なきことゝは云ひ乍ら又た一つの歎なり希くは世の人々よ無慾にして大慈悲心の御教祖の如何に尊くましましませしかを念ト念ドて淨き御たましひの流れをくむことをせよ

教會は鏡の屋敷也ホコリをおく勿れ教師は神の御使也天の御心を忘るゝ勿れをさづけをつとめは天の職也我身を淨くするを怠る勿れ

第十八章　御入牢

高き木は風に吹かるゝことつよく芳しき草は馬に食いるゝことはやし玉は碎け申すけれども瓦はつねに完しア、世は秀ぐるゝものをねたむが天は人をくるしめて而して後ち其の人に大役を授くるかや

御教祖は人ゝ罵られ人に嘲られ人に恥しめられいろ〳〵さま〴〵の憂き目に會ひ玉ひしが無情なる世は尚ほ御教祖をくるしめんとてや屢々牢屋に入り玉ふ

そも世の人々は我が犯したる罪によりて牢屋につながりしが例なれども御教祖は少しも犯し玉へる罪とてはなく御心にやましき御覺へあらざれば牢屋に入るも牢屋より出づるもさまで心にはかけ玉はぜいつも御心

たかに御氣持すゞしくましませり
あはれなる世の人々がまこの神にすがることをせず
實の親にもたるゝことをせゞ我意我慾我まゝに世を渡
るをばさぞや不便と思召しけん警察にては巡査監獄に
ては看守などを見ること世のつねの如くひるよる我身
を番するを氣の毒にも思召しふところより金をとり出
しねぎらはんとして却つてとがめられ玉ひしことなど
もあり嵐さむき冬の夜ひとやにありて町の鈴の音をそ
ばのものにきゝウドン賣るものの來れることを知りて番
人にそれ買い玉へとて錢を出し却つてとがめられ玉ひ

しこともあり實に御教祖は御身牢屋にましませども御
心は天の親神の御そばにありされば浮世のくろふを少
しも苦勞となし玉はず常より御心うるわしく御心たくま
しく御元氣すこやかに御一念唯々衆生濟度の上にあり
けり
その牢屋にあり玉ふや五日七日食し玉はねどもかつて
うゐ玉はず十日十五日水をもものみ玉はねどもつかれ玉
わぬ御顏色御すがたはいつもあざやかに清らかにまし
ませりこれまことに神秘不可思議の御靈力にて我らの
畏むべき限りなり

まことに夫れ恭々しく惟みるに天の大神の仰を蒙りてかりに人の身と姿をやつし玉へる御教祖の御目には道あるのみ理あるのみ光あるのみ悟あるのみ助くべき衆生あるのみ一切の艱難も一切の辛苦も露たに意になし玉はさるは眞に天の甘露のつねに御身を惠めばなり御教祖は御身牢屋にましませども御心は天難陀の大園林に逍遙し玉ふに似たるかなア、尊きなり聖きかなア、御教祖の御涙は萬衆をうるおし御なさけは萬衆をなぐさめ溫め御行は萬衆を直に悟らしめ奮ひ起しむゝ赤きかな

第十九章　御慈悲

世界一切の宗教の教祖は皆な御慈悲心一つなり宗教の本源は深きなさけなり清き助けなり廣ろきめぐみなり強きいつくしみなり堅きまことなり我御教祖はすべての宗教の御德を唯御一身にそなへ玉ふ

御思召はすべてまこと也御言葉はすべてまこと也御擧動はすべてまこと也我か御教祖は天地一貫神佛一致のまことを備へ玉ふ

大なる他力本願は信神の要也大なる自力本願は悟道の要也我教祖は信神悟道の大要を平易明快に諭し玉ふ

今更云ふまでもなく學問は末なり財寶は末なり技藝は末なり政治も經濟も皆な末なり本は唯一つの宗教心本は唯一つの大慈悲心本は唯一つのまことの心これぞ此の世の命なりける

神の御國はウブの國なり神乃御國はジミの國なり神の御國はスナホの國なり神の御國はマコトの國なり御教祖は此の道理を以て人を治め國を治め世を治めんと定め玉ふ

イツワリは惡なりカザリは惡なりヤマヨイは惡なりヤマイは惡なりこれらは皆な因緣をきるの一事を以てよく治めんと定め玉ふ

何人にも分り易きが大理なり何人にも至り易きが大悟なり何人にも行ひ易きが大道なり何人にも感ド易きが妙法也御教祖はこれを示し玉ふ

天地の本宇宙の本人の本佛の本神の本をとき出しときさとし人に安心と立命と元氣とを授け玉ふ處の御教祖の御慈悲心は世にも類なき御大慈の御大悲の心なりけるまことや無上正覺の轉輪王の御靈は八正の光を指し玉ひける

第二十章　御歸幽

此の世に生まるゝはあの世を出づるなり此の世を死ぬるはあの世へ歸るなり歸るの國を幽國と云ふ

幽國を思はざるものは人にあらず幽國を知らざるものは人にあらぎ幽國を悟らざるものは人にあらぎ

悪しきに悪き報あり善きに善き報あり因果報應これを天理人道の要と云ふ

まことは細く堅く永きものなり太く弱く短きものはまこと

ことにあらぎこれを人の實踐窮行の要とす

貧富貴賤老幼は差別を去れば唯一つの根のみ一つの根なりとは云ひ作ら人はへたての暗に迷ふこれを救ふを

道の光となす

因縁とは血すゝの糸すゝを云ふめぐり〳〵どもつきぎまはり〳〵れどはてずいつまでも身はまとふをいんねんと云ふ因縁は三世に通ひ七生につながる善因縁は善心の報なり悪因縁は悪心の報なり我身を省み我身をつゝしみ我身を戒め悪しきを拂ひ善きをつむこれをかゝるものゝ理ほこりの理の本源となす

此の世は一つの旅路なり歩めば山あり川あり海あり森あり里あり都あり或ときは上ぼり或ときは下り或ときは沈み或ときは浮ぶ人は此の世の旅人なり旅人の第一

の杖を神の教の道と云ふ神の教の道に依つて人は人に盡し國に盡し世に盡すの民となるべき也

我大神は唯一の神也心を盡し靈を盡し意を盡し力を盡して親の神に順ふべし

ア、御教祖は一切の艱難辛苦を越へ玉へり一切のなやみくるしみを過き玉へり一切の物事の味をなめ玉へり多くのあはれなる人を救ひ玉へり多くの罪ふかき者に迫られ玉へり招かざるに寄りくる處の信徒らは三万五万十万と日にまし月にましそへり天理教万々歳の光は衆生の眼にも見ゆる樣になり來れりかりものゝ理はゝ

りの理その他千々万つの眞理を示さんがために御教祖は一切の難行苦行を越へ玉へり自から越へて人にひなかたを示し玉へり

天の大神は如何ゝ御足納やまし、まし、つらん而して御教祖の面妙相好げに人天の奇特を具へ玉へり

申すも畏けれど御教祖のうらゝかなるは櫻の花にまされり其氣高きは富士の山にまされりその清きは琵琶の湖水にまされり其の潔白なるは雪にまさりその堅固なるは鐵石にもまされりげにや神州の大日本國みづほの國根の國底の國常への國を助け救ひて遂に世界一列

御濟度の御教祖の御たましひは日月の御心天のすべての命の御心親の大神の御心の彌やうるはしく彌やゆたけくその御身に宿りましけん尊しとも畏しとも申すに言葉はなかりけり

嗚呼時は正に明治廿一年正月廿六日水仙の花は雪間に匂ひ寒紅梅は寒さに香りをはなつのとき御教祖は天の御迎に從ひて安らかに御歸幽ましましぬその御名殘の御言葉にのたまわく「我身はかすかなる世にかへれども我心は神の御そばにありて御道の教の榮へ行くをまもるべし」と諸國の民涙にむせばざるものはなし實に

御とし八十九才此の世の旅ををはり玉ふ(終り)

天の福音

だんぐ　ぜうろうさんでくるならば
　ぜうりうのあのそころうんどよ
みなそろふてそやうらを先をまるならば
　そばがいさめばうそのひさぎる
なるあのあちがわんこをうふけれども
　ちがいあるならうなどあるまる
ちらしふらのらわれどるそきのどくや
　いのあやまひをこころのあとて
やまひとて皆うひなみとわなりはどに
　うみのりッぷくひまそのらわを

いまゝでゆめのみのゆめとそきめんめら
せひあるゝあゆをくあらわ〳〵ふあを
やまさのやい ばらぐろゆめけみちを
つるぎのあのゆをふりぬけあら
まだみんるひのあのゆあをあち あのを
それをこゝあらはをみちあり
はをみちをだん〳〵こをばおふみちや
これがたゝう あるんみちでゆる
このをあちうあこをでりをりあらはどに
うみりちドよどこれらわがこを
いちれらはあゝきとりふをあらけれで
ちゝとはあこりがつりあゆあなり

このさきわこゝろ〳〵づめをちやんを
あをでのうくわりあきふふふをふ
ちやん弟ふれやがりうはどおをふをを
うみのてはあきこきをこりあわん
めん〳〵の和ゆふこゝろをりうんでな
うみのこゝろわみあちがふでな
たのやまの和ふりけゆわりふるみづなれど
でをあらふでりでゆくまドりで
たん〳〵きこゝろをづめをちあんをる
をんだるみづをこのわをくるぞや
これらわふのやまりけんをびをりを
りのなでゆくゆ終うど生るなを

ちんちつるふをけのちどよのこころあら
あるのあわいてきーめをうけをる
くちさきのりのちるよばめをそのらんあの
ちんぶこころるまこのあるあら
だんぐ堂なふでそるをあこのるふは
うみのめちだやーやんーそみよ
まんげんりみなくかみのめーあのや
あんをあめあそらこふをのるやら
こぶをこころるづのこををを目こうす
めをのちどよでむねのうちより
ひをたをけたあんかみあをめる

たのめまりをめのりのちれあめふふ
をこるをれどをを目がみあんて
だんぐとあふくるを弟ふるこぶあち木
よふ木るあるあのをなぞや
いのな木をあふくるをそのあるけれど
いがみのがみわおれりうあわん
せめいちうをねぶうちるりこぶそうど
めみがはめをやをめをみをのよ
これのらりのみがおめそんあらわ紙て
やあのりのこりてをうどをるぞや
いちれりるのみがそうどをるあらは
こころのをんでよあを目づくめや

あるものもめがひきうけまるうちに
どんなことでもちうよとさいや
たうやまのーんがたーらわとうどんや
これがだいいちのみのりッぷく
ちあんせきるなんぼまんだるみづやをて
どろをりまあらよでることをなり
にでりみづりやくまるなんことをるそわ
しんのそらちのりれやふがあい
そーらなんりやくりれふることとならば
まらだいーのををさまりがつく
そのふをれどめたのみがしーんぢつを
とりをきのまるうをををゆめな

りまこでをーんがくのうきなるけれど
をををーをふるゆのわなあいぞや
そのれづやどろうみなのがみちをがら
しりふるゆのそなりはづのことを
こまをまでとこのふとどめをなりこをを
たんぐとりてきのまをこをなをを
あるものもなりことバのりをくけまど
こまるまちでふことをそないぞや
しんぢつのこまけりちどよどあるのらふ
あるものこわみををらるないぞや
しやんをふるろづたまけのこのゆふふ
まんげんわざををらるをゆふな

これのらのみのこゝろをのみたるは
こゝろをこゝろはひきあわせをる
このはなーちふをのこをやををゆめるよ
めみがーんぢつみのねたるゆゑ
こをのらわのそはちのらをのみたるの
ちのらくらべをるををゆへよ
いのほどのがうをきあらばだーそみよ
めみのそのゆるわばいはちのらを
しんぢらはのみがおゆをへんをるうらを
いのをゆふゆゆをるとゆへよ
いまゝでとのちがふほんをまゝをる
めみのざんねんをんやーふやら

このをきをるゆんがうらをまゝをる
みをいのちれわをふちーそいよ
おなど木のねをゑだとはこをならば
ゑたわをれくるゆらをのへをる
いまゝでとうらをゑらいをゆゆれど
これのらをきわをれるばりや
はほんみふちいをふはをゆたを
ねがはらいをばおそれいるぞや
このちのらゆんげんん をとわゆわれん
めみのちのうらやこれはうをわん
このふをはきわーくらーはるけを
をををーをあるゆのわをいのて

このゆとをくわをくらりあるとをならば
やまりのをとるとををりみに
あゆゆのゆーらずるくらをこの子ども
のをのめへりわいちらーきこと
あふとてゆやまりをりふてはさらはなー
こころちがいのみちがあるのち
このみちわをーりをりーりをのありと
よくをのふまんこれがほこりや
このよのはんげんをみをのみの子や
のみのはふこををのをきょわけ
これらわをりこをばうりとりてをく
おまのらをきをたーうみをりよ

先をみへんのみのゆこををきこをを
だんぐきりてをあんーをみよ
たのやまゆをたつる木をたりをこよ
そだつる木をみををなどこを
だんぐとをふどをるてゆこのよふい
のをののらだやをあんーをよ
このたびりうみがをゆをへでるのらい
よろづのこををみををーあるて
先へくのみのうちよをのりゆをを
ちらずるりてわをらのゆわのらん
ちやん殆ふやまりをりふてらをらなー
のみのみちををりけんをるそや

いきのみちをとりだらけてあるものらふ
　　ものふけをゆちてそうどーふそる
せのいちうをふくみひとでであるけきど
　　のみがとこころをちをふゆがをー
あふてものをりちどよがちをふ多ら
　　のらうまけうふ多こをわをいぞや
りのほどまみんたるこををりふたをて
　　をををちちねはわのるめわ多ち
いまとてわがくをんなどいふあをて
　　みんを多りこをちらよちろまい
こがさきわみんを多りことだんぐと
　　まろらがこををみ多をりてをく

このふを物さめるものみをそんゆのみ
　　のををのみをがこころわけるで
あふてゆーらんあいだわをのまこや
　　このみのぢうふふーらーふる多ら
これきりてみ多りちきりそーやんをよ
　　なるのまろづわこころちだいや
めくくまわが多ーあんりがらんゆの
　　のみがそれぐみわけをるぞや
ひをやーきを約ドくらーそりるうちふ
　　のみゆわをけゆりるををゆへよ
このそあーみ多りちきりわーあん緒よ
　　をなどてこころわさらふがりろふまい

をや子でをあうふのをのものきよだいを
みをめん〳〵まこころちがうて
どのふををものーりことををりふたとて
めみがーんちつうけとををなら
いまゝでわのらやりほんをりふたれど
こをめらさきわりをんばめをや
ゐださきを物ふをるみんてあめんものの
ゐまんばをれるさきをみてりよ
をををるわちりさりふでねがあらい
どのふをことをものををーるをり
ちはやとてをうふがあらりをををふをよ
こころのまことをこれがちんちつ

をうふやををたれがをるやをををものふをよ
このふらドめゝ神のををこと
にんげんりのさをりものであるめらに
めづらーこをををうふなどゝゆふ
ちんちつのめみりたらきーめけたら
せめりゆちをりこゝろをみをる
をふらをものをることとゝををものふめな
こゝろうけをををだりめやをを
このめやーをるよこをやをををものふめな
みちのをせんりへだてあるめる
このこをををにをりあてものををものふてを
うけとをーだりをぐるめやーを

こののやゝなんのことやをもふのな
せんあくともゆみのやをてな
よきこをりあてもあゝきをもふそを
ゆのまゝにぐるのやをこと多を
せのい中をふくくらをのそのうちん
いちれりわみなもやのでとくや
これをるのゝんぢつのみわ月日あを
あとをるうみわとふくあるそや
これのらわ月日のこゝろざんねんを
もあをるもふはうりをるそや
このをきわどのふをわこをたりとそを
これをやまりとをらりをもゆな

いまゝでの月日ざんねんやまゝに
つもをそあるをのやゝをるそや
ちんぢつのやゝとりゆわこれことや
たのやまわみなゝふちゝそりよ
このりをゝをんとをもをきりそりる
てん火火のあめうみわりなみや
これふゆをたのりやまでもみつうりく
たるをとやとそのゆなきわあい
なるものを月日ちそりをるのらわ
おゆあきちりをりりふそあいそや
うみををもぢゝんをあのせみづつきの
これれ月日のざんねんりゝぶく

このことをいまゝてたれもあらんうら
こよなひ月日さきあらをる
いまゝでわぎうはとりふらまゝあれど
あとさきーりなことわあろふまい
こよなびわさきをるることをこあるあら
あらーををくせみはさわをうく
だんくををんがうさあるをようん
ぎうばとみんるみちがなるあを
みんげんをやまりとりふてをなけ逆ど
こよあはドまりーをこあるをー
このことをーらーあるのらだんくと
ーうりこやーるるーやもくををる

いのはどうをあーをーてきのーてを
きをとさるのーるのりりふてをりなあら
このあのちりとてんをはちつはをや
ありをりふてるみをきゝわける
そりよりできあるんけんである

百二拾二言

「此の書の成り立ちし次第」

謹而白す

明治三十二年五月以來天理教會本部長中山新次郎殿に拜謁の榮を玉りしこと七八度高安分教會長松村吉太郎殿に諭訓を玉りしこと十余度みなこと〴〵我身を此の信仰に導き玉ひし種ならぬはなしされども最もよく我身を養ひ我身を育て我身を教へ玉ひしは天理教高津出張所山本榮次郎西岡芳松二君也山本君年未だ若けれども誠意誠心我身を育て玉へり西岡君は實夫れ天下にまれなる大信仰心を保つの人誠に重太郎生々代々の恩人也西岡君日夜夢寐の間も御教祖の御道を忘れず品行方正にして行動圓滿常に職業を勵み家内ひつまじく厝人をいたはり育て一意一念御教祖の御足跡をたどらんことを期せり人に接すること厚く自づから奉づること薄く勤勉苦心而して心はたへず清淨明白にして天然に天理の道にかなへり人稱へて得難きの信者となす實に夫れ明治三十二年七月十三日大阪に於ける天理教大演述會は前代未聞の一大事これを成さしめしは西岡君の苦心也爾來『天理教の本領天の光御かぐら歌解辨天理教道話』の四書を完成せしめしは悉く西岡君教訓の賜也山本君とともに之を助けらる我身は今日迄これを人に悟るを秘せしかども今幸に本書を公にするの仕合に際會したる喜を以て茲に我信仰の次第を述ぶ嗚呼大世界未曾有の天理教々祖御一代記を天下に公にするの信仰心を得たるは眞に恩人西岡芳松君の力なり西岡君よく微力を以て此の大事を成す思ふに上は本部長高安分教會長の清德の流れの末に及ぶの影に依るまことに天理教全体の鑑龜と云ふべし聊か記して我が心中の難有き結搆をのぶ終りにのぞんで云ふ本書は實に賀來申太郎多田耕次郎二君が義氣俠心書つて出資經營の勞を採り玉ひし力によつて大方に示すの榮を得るに至りしもの也茲に謹で謝意を表白す

三十三年一月二十八日

山中重太郎　識

明治參拾參年壹月卅一日印刷
明治參拾參年貳月　日發行
定價　金五十錢

近江國蒲生郡山中村第貳十壹番屋敷
著述者　山中重太郎
大阪市東區北久寶寺町一丁目百五十一番邸
發行者　賀來申太郎
大阪市南區鰻谷東ノ町百七十五番邸
印刷者　前田菊松
大阪市西區立賣堀南通三丁目十二番邸
發行所　多田耕治郎
大阪市東區北久寶寺町一丁目百五十一番邸
發行所　賀來申太郎

不許複製